

工夫して計算する判断力を養う指導の在り方
～第3学年「2けたをかけるかけ算」の実践を通して～

長岡市立川崎小学校
藤井 大輔 (21年度)

【主張】

全国学力・学習状況調査において、計算の工夫に関する問題の正答率は3～6割程度を推移しており、課題が改善されていない。これまでの自分の実践を振り返ると、「数と計算」領域に関して、筆算に重点を置き、確実に計算ができるよう指導を行ってきた。子どもは、筆算のよさは実感したが、その後の計算の工夫は、よさを伝えても、計算場面で工夫をしないことが多く見られた。筆算はどんな計算でも答えを求めることができるため、複雑なアルゴリズムを覚えて使い慣れてしまえば、筆算を捨ててまで計算の工夫をしようと思わない方が普通であると考えられる。「既習を生かして工夫しながら計算し、既習が使えない時に筆算を使う」といった筆算も計算の工夫のよさの一つとした見方・考え方を身に付けていくことができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、第3学年「2けたをかけるかけ算」の指導において、次の2点から研究を進めた。①計算の工夫、②筆算による計算の順に行い、計算の工夫のスキルを身に付ける単元構成を行うとともに、計算の工夫に必要な見方・考え方を視覚的に捉えさせるために計算の技シートにまとめる活動を取り入れた。

本研究を通して、「九九や10倍、100倍といった既習の計算の仕方を生かして2桁のかけ算の積を求める。既習が使えない時は筆算を使う。」といった見方・考え方を身に付けさせることで、工夫して計算する方法を選択する判断力を身に付けさせることにつながった。